

論文

丹野セツ ― 女性の戦争責任とジェンダー平等について

南 コニー

Setsu Tanno—Women's War Responsibility and Gender Equality

MINAMI Connie

## 要 旨

本論文は、日本の女性の戦争体験と、労働運動における役割を検証し、女性を単なる戦争の犠牲者とみるのではなく、女性の戦争責任に焦点を当てている。本論では主に『ひき裂かれて：母の戦争体験』（戦争中の生活を描いた女性の書簡集）と労働運動家である丹野セツの生涯と活動を分析し、当時の女性たちの思想や価値観を比較考察しており、とりわけ『ひき裂かれて』の女性たちが物質的な困窮に焦点を当て、戦争における自らの役割を批判的に認識していなかった点と、丹野セツの活動及び女性たちの「無知」に対する批判を対比させている。丹野セツは労働運動への関与を通して、戦争を煽ったシステムの力と、一般市民の共犯性を鋭く理解しており、収監されながらも反戦を唱え続けていた人物である。また本論では、労働環境改善のためのストライキを行った紡績工、梅津はぎ子の事例を取り上げ、女性労働者の抵抗の可能性を強調している。丹野や梅津のような反戦運動や社会格差是正の抵抗運動に従事した女性たちは、これまで学校教育の歴史教科書などには掲載されてこなかったが、近年、各国で女性徴兵の呼び声が高まり、戦争において女性の「参戦」が求められている現状を踏まえ、これらの歴史的記録の現代的な意義が改めて見直されるべきであると考ええる。

**キーワード：**丹野セツ、山川菊栄、戦争責任、ジェンダー平等、ノーベル平和賞2024

## Abstract

This paper examines the war experiences of Japanese women and their role in the labor movement, focusing on women's war responsibilities rather than viewing women as mere victims of war. It analyses the life and activities of labor activist Setsu Tanno and the book *Hikisakarete: My Mother's War Experience* (a collection of women's letters describing their wartime lives) to examine the attitudes and values of the women of the time. In particular, the comparison will focus on the material deprivations of the women in *Hikisakarete* and their role in the war. The paper contrasts the lack of critical awareness and ignorance of the role of women in the war, and the awareness and activities of Setsu Tanno. Through her involvement in the labor movement, Setsu Tanno had a keen understanding of the systemic forces fueling the war and the complicity of ordinary citizens and was someone who continued to argue against the war even after her imprisonment. This essay also takes up the case of Hagiko Umezu, a single woman who went on strike to improve her working conditions, highlighting the potential for resistance by women workers. Women who engaged in anti-war movements and resistance movements to correct inequalities have rarely been included in history textbooks for school education, but with calls in recent years for female conscription in many countries and 'participation' of women in wars, these historical records are of great contemporary significance.

**Keywords:** Setsu Tanno, Kikue Yamakawa, War responsibility, Gender equality, Nobel peace prize 2024

## はじめに

2025年は終戦から80年目となるが、若い人たちの間では汐見夏衛の『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』が人気を博し、その影響からか鹿児島県南九州市にある知覧特攻平和会館を訪れる人や「特攻」について関心を抱く若者が増えているという。同館は若くして散った特攻隊員の家族への遺書や恋人への手紙、日記などの遺品が残されており、現代の私たちが戦争の悲惨さや平和について考えるための記念館として教育的な意義を有している。しかし、パリオリンピックに参加した日本の卓球選手の発言が国際的な問題になるなど、「特攻」の受け止め方は国内外では随分と異なる。そのためか、知覧特攻平和会館の英語表記は Chiran Peace Museum であり、「特攻」は省かれている。そこには、特攻 (Suicide attack) という言葉が「平和」と並列表記された場合の矛盾や違和感、あるいは対外的な配慮が働いているのかもしれない。2022年に刊行された『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』では、主人公の百合が時を超えて、戦時中に生きた特攻隊員と運命的に出会い、命の儚さに直面し、愛の永遠性を希求する様などが描かれている。また、戦争の悲劇や平和の重要性について改めて考えさせられる作品となっており、特に、主人公の葛藤や現代と戦時中の人々の価値観の違いが理解しやすい形で提示されている。「…この人たちは、何を言っているんだろう？ まったく理解できない。どうしてこんな考え方ができるの？ だって私は知っている。日本はもうすぐ戦争に敗ける。この人たちが今からしようとしていることは、特攻なんていうことは、無駄死にでしかない。そんなことをしてもしなくても、日本は敗ける<sup>1)</sup>」。主人公の思いが若い特攻隊員たちに伝わらない歯痒さや、どうにもならない不条理に対する悔しさが窺える。また、主人公はタイムスリップした現地で仲良くなった同年代の女の子千代が語る言葉、「兵隊さんは戦地で戦い、私たちは銃後を守る」という学徒動員の合言葉に対しても、驚きを隠せない。また千代は、女子どもは直接手伝えないから、工場で働くことで兵隊たちの応援をしていることを誇りに思っているとも述べるが、それに対して百合は、この時代の人たちが戦争を悪いものだとは捉えていないことに愕然とする。現代の世界に生きる百合にとって、戦争は恐ろしいものであり、2度と繰り返してはならないものであると教えられており、戦争に参戦することが「誇り」であるという価値観は受け入れ難く感じられる。本論では、当時の女性たちの価値観を確認するとともに、戦後それがどのように変化したのか、さらに、銃後の女性の戦争責任や同時代の労働運動についても考察したい。

### 1. 『ひき裂かれて』にみる女性たちの証言と「無知」について

「みんなで戦争体験を書きましょう」というある主婦の呼びかけに応じて朝日新聞の女性投稿欄「ひととき」に全国から寄せられた投書を筑摩書房が編纂し、1959年の終戦記念日にあわせて出版したものが『ひき裂かれて：母の戦争体験』である<sup>2)</sup>。最初は、子どもを戦争から守

1) 汐見夏衛『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』、スターツ出版文庫、2022年、p. 71 (Kindle)。

れなかった母親たちのつらい思いを子どもたちにも伝えたいという意図から始められたが、やがて世代を超えたさらに多くの人たちの声を聞きたいという気持ちから、各地の母親大会や国民文化集会などの場で朝日新聞の「ひととき」への投稿が提案されたというしだいである。『ひき裂かれて』というタイトルは、戦争によって愛するものたちからひき裂かれ、肉体と精神の両方にさまざまな傷を負った人たちが「ひき裂かれたことによる傷跡を見きわめたい」という強い意志に由来している。「戦争中の暮らし」という項目では、疎開先での田舎暮らし、食糧難と劣悪な配給、他人との共同生活のなかでのギスギスした人間関係や、女性同士の恨みや妬みなどが赤裸々に綴られている。爆撃機が頭上を飛び交うようになっていても、物々交換の対象となる嫁入り道具の着物や指輪、金物などへの執着は凄まじく、ある女性は疎開先で雑貨の配給の際のくじ引きでナベが当たったときのようすを次のように証言している。「みんなのうらみやら、羨みやらが、ナベに向かって集まっているようで、わたしは嫌になってしまった。えいめんどうだ、ナベなんか返してしまおうかとも思った<sup>3)</sup>」。この女性は結局ナベを返すことはしなかったが、疎開先の家人とこのナベのせいで諍いが絶えなくなり、ついには家を出る決心をする。「戦争中の暮らし」の項目では、このナベの話に見られるような物資への執着や、食料調達に焦点が当てられた生活話が多いが、一方で「将校の妻」のように、特権階級に属していたために「戦中・戦後を通じて一度もリュックをかついでの買い出しをしたこと」も「勤労奉仕をしたこと<sup>4)</sup>」もなかったと、当時の恵まれた環境を心苦しく振り返る主婦の話も含まれている。このように、総じて戦中の物資や食べ物への執着、見栄や虚栄などが綴られた話が多いなかで、「無知の責任」という他とは異なる角度で書かれた一文がある。筆者の津村しのは、他の女性たちのことを次のように書いている。「大根をごはんの中に炊き込んだとか、馬鈴薯の蓄えも少なくなって心細いとか、このひとたちは食べ物の話ばかりで、ほかのことは考えないのかしら。戦争のことは少しも話さないことが、わたしには歯痒かった<sup>5)</sup>」。津村は、食べものの心配ばかりしていた姑や姉は、所詮戦争の傍観者であり、戦争を我が事とを感じる人たちとは受け取り方が違うのだと考えており、自分も含めた女性たちの「無知」と戦争責任について次のように述べている。

無知そのものは悪でなくとも、それは知らぬ間に悪に繋がっている場合が往々にしてあるのです。無知を利用する者の罪は、いうまでもなく、利用された側に罪がないとはいえないわけです。知らなかったということは、一つの罪であるわけです。ただ、無知ゆえに、あの頃のわたしの在り方は零以下のものとなってしまいました。無知ということは、どれほど美しい動機から生まれても、根のない仇花となりうる恐ろしいものであるということがつくづくと思われ、戦争に対して、無知の責任ということを感じないわけにはいきません<sup>6)</sup>。

2) すでに2年前の1956年には、「生活をつづる会」のひなたグループの主婦たちが「母の戦争体験」というガリ版による文集を書き上げていた。

3) 鶴見和子・牧瀬菊枝編『ひき裂かれて：母の戦争体験』、筑摩書房、1959年、p. 16。

4) 同書、p. 35。

5) 同書、p. 64。

ここで津村は、たとえ正しく生きるべく努めても無知であるゆえに悪となってしまうことの悲しさを振り返っている。また彼女は自分の母が全身全霊で愛してきた彼女の弟の出征の際には涙を見せず、悲しそうなようすをしていなかったことを思い出し、もし母が戦争は罪悪であり、それに繋がる戦死が無意味なものであると知っていたなら、きっと人目も憚らずに泣き喚いていただろうと考えている。その一方で、その母の態度こそが時代の倫理であったとする。つまり、母から悲しむことを奪ったのは、当時の最上の倫理としての忠節であると結論づける。忠節のためには、最愛の息子を国に捧げなければならず、それを拒んだり悲しんだりすることはエゴイズムに他ならず、当時盛んに顕揚されていた葉隠精神とも相容れないからである。津村は戦中もたびたび弟と「戦争責任」について議論を交わし、たとえエゴイズムからでも戦争に協力しなかった人の方が正しかったのかどうかについての答えを模索していた。そして戦後になって、戦前には考えも及ばなかった答えを民主主義教育から学ぶことができたとしている。

そうだ、生きることなのだ。わたしのこの命は、国のものでもなく、天皇のものでもなく、わたし自身のものなのだ。このすばらしい意味が、どんな場合でもどんな時代でも、いつでもそれは最高のものでありえただろうか<sup>7)</sup>。

津村は、人間は自分の命をいっぱいになりたいと願うのが本能であり、それこそが正常な精神であるはずだが、時代精神に流され、無知のまま罪を犯してしまう危険性はつねにありえることなのではないかと読者に問いかけている。また本書の編者のひとり牧瀬菊枝は、主婦サークルにおいて十数年にわたり生活記録をまとめてきたが、戦争中おとなであった母たちの戦争責任の追及まではできなかったと述べている。**つまり戦争を生き延びた母親たちは自分たちの歴史を客観的に書くにはどうしたらよいのか、つまり女性たちが主体者として戦争を振り返り、自分のことを客観視し、自分の行いを反省的に書く方法が見つからず思い悩んでいた**のである。そして、同じ頃、広島的主婦サークルで戦争記録を残す活動をしていた山代巴もまた同じ壁にぶつかり、生活記録の壁を破る方法が見つからないという問題を抱えていた。二人はその当時時代の風潮に押し流されてきた多くの女性たちは、自分のことを多面的、大局的に書くことが難しく、なんらかの信用できる参照軸との比較がない限り、自分自身の歩みを客観視できないのではないかと考えた結果、信頼に足る座標として「丹野セツ」という女性を見つける。丹野セツ（1902－1987）は、労働者解放運動のなかで、時の圧政や権力に抵抗し続けた女性活動家である。牧瀬と山代の二人は、この丹野セツとその関係者から聞き出したり討論したりしたものを『丹野セツ：革命運動に生きる』を編纂することによって、自分たちがこれまでまとめてきた母たちの生活記録の歴史と比較検討し、戦争責任の追及にまで議論を深めることができるのではないかと考える。こうした牧瀬と山代の試みを検討してみよう。

---

6) 同書、p. 59。

7) 同書、p. 62。

## 2. 丹野セツらの労働運動と覚醒について

丹野セツは1902年11月3日、現在の福島県いわき市の小名浜港の近くで生まれ、日立鉱山の長屋で育った。日立本山病院で看護師として勤めているときに、労働解放運動に目覚め、1923年3月8日、日本で最初の国際女性デーの集会に参加し、同日に行われた失業防止大会で検束されている。彼女は、その後、これまで男性が中心だった労働組合に女性部も必要であると提唱し、婦人部の設置に尽力する。山代が、戦前戦中の丹野セツの抵抗運動を探りたいと考えたのは、革命家としての丹野セツの伝記を書くためではなく、女性たちの書くものに権力批判や自己批判が欠如し、自分を客観視できず、記録集全体を通して女性たちが自分を「被害者」として見る意識が強いことに疑問を抱いていたからである。丹野セツは、『ひき裂かれて』を読んで抱いた疑問を牧瀬と山代に次のように伝えている。

わたしには批評家のするような批評はできませんが、十五篇も集めている中に田中さんのように権力にまっこうから対決した女性の記録が一編もないのが、さびしいと思いました。身辺に抵抗者のあった方の記録も三編しかない。なんの抵抗もなく、あの戦争にまきこまれた人がたの、ぐちと泣きごとばかりが印象に残って、その人たちの悪いことをしたという反省が印象に残らない。どういうことでしょう<sup>8)</sup>。

丹野は女性たちの置かれた立場に理解を示しつつも、女性たちの怒りのエネルギーが抵抗につながらなかったことを批判する。そのうえで戦争という状況の中では、自分も相手も歪み、ただ目の前の相手を憎らしいと思うのみで、自分を客観視することがそもそも困難であるとしている。さらに、女性たちはそもそも戦争がどうして起こったのかということや、社会のあり方についての認識が欠如していたのではないかと丹野は次のように述べている。

戦争がどうして起こったかということ、つまり資本主義社会が発達して帝国主義時代になって、いわゆる侵略戦争にゆく、こういう戦争の発展というものをこの人がたは見えないわけですよ。ですから、自分の国、日本が勝てば、自分たちも良くなるんだという考え方しかもっていなかったわけですね<sup>9)</sup>。

丹野は、生活の質が向上するよう労働組合をつくり、搾取的構造の資本主義に抵抗し、封建的なシステムを廃止しようとした多くの人々が、彼女自身も含め、弾圧され投獄されている間に、「自分たちがしぼられているということさえ<sup>10)</sup>」気づかず、戦時の思想に流されてしまったのではないかと考える。実際、丹野が学んだ社会主義思想も労働運動や農民運動が盛んだった大正末期から昭和初期までは大きな広がりをもせていたものの、政府の激しい弾圧を受け、

---

8) 丹野セツ述、山代巴・牧瀬菊枝編『丹野セツ：革命運動に生きる』、勁草書房、1969年、p. 272。

9) 同書、p. 274。

10) 同書、p. 274。



マルクス主義の書物にさえ触れることが難しくなってしまった。『ひき裂かれて』の中で生活記録を書いた多くの主婦がそのような時代に娘時代を過ごしたのである。丹野セツとの討論のなかで、山代は時流に流されないためには何が必要なのかと次のような疑問を投じている。

家庭の主婦の座というのは、少しは理屈がわかっている場合でも、日常性に流されてしまうという危険性がつきものなんですね。それは戦後のマイホームにも続いている。テレビをぼんやりと見ているうちに、いつの間にか時流に押し流されてしまうのですから。日常生活の一つ一つに対していつも権力批判の立場を持ち続けて生きるにはどうしたらいいのか。マイホーム主義では子どもの幸福さえ守れなくなる<sup>11)</sup>。

「いつの間にか時流に押し流され」と、自分の「子どもの幸福さえ守れなくなる」、ということは、前項で述べた津村の「無知の責任」につながるのではないだろうか。つまり女性たちの戦争責任の背景には、資本主義の中で培われてきた所有欲と怠惰が根底にあり、戦後の今日でもそれは続いていく危険性があると山代は訴えているのである。ところで、1977年から2002年まで日本の小学校3年生用の国語の教科書に収録されていた『おかあさんの木』という作品の中には、息子たちを戦場に送り出した母親の次のような後悔の言葉が収められている。

なにもおまえたちのせいではないぞえ。日本じゅうの、とうさんやかあさんがよわかったんじゃ。みんなして、むすこを兵隊にはやられん、戦争はいやだと、いっしょうけんめいいうておったら、こうはならなかったでな<sup>12)</sup>。

『おかあさんの木』は長野県の小さな町に住むミツが7人の元気な男の子を産むが、成長した子どもたちはひとりずつ出征し、そのたびにミツは庭先に桐の木を植えて息子の無事な帰りを待つという話である。平和教育の一環として教科書に掲載されたこの話は、終戦70年の節目の2015年に映画化もされたが、『はだしのゲン』と同様に現在は教科書から姿を消したようである。このような母たちの反省の声を汲み上げた作品集としての『ひき裂かれて』には、「子どもを戦争から守ることのできなかった母親の辛い思いを、子どもたちに伝えたい」という目標があり、権力批判の弱さはあっても母親たちの反戦行動の先駆的なものがあるのではないかと高く評価する人たちがいる一方で、牧瀬のように、たとえ、戦争体験を書いても、まだまだ行動に踏み切った人は少数であり、もやもやした家族との問題に気を取られて、あがいているだけの方が多かったのだと判断する人も少なくない。「無知」から脱却し、抵抗を行動へとつなげるにはどうすればいいのか、同時代の事例に基づいて考察したい。

### 3. 女性たちの抵抗と行動について

丹野セツが女性の人権を守る労働組合の婦人部を創設する必要性を痛感した原点には梅津は

---

11) 同書、p. 280。

12) 大川悦生『おかあさんの木』、ポプラ社、1969年、p. 20。

ぎ子という紡績工の存在があった。当時、日本の紡績女工たちの劣悪な状況下での長時間労働は国際的にも問題視され、イギリスの労働次官を務めたボンドフィールド嬢は、「日本紡績女工の夜業は人類文明の汚点だ<sup>13)</sup>」と労働者保護法が發布されていないことを猛批判した。女工哀史として知られるこのような実情は度重なる議論<sup>14)</sup>を巻き起こしていたものの、解決策が講じられないまま野放しとなっていた。梅津はそのような状況の中、「かごの鳥争議」と呼ばれる、失われた女性の声を求めて立ち上がった女性のひとりである。関東大震災で工場がつぶれ、梅津は織物工場の機械の修理のために大阪の金属労働組合に組織されていた修理工たちとの関わりを通して、山川菊栄が書いた『牙をぬかれた狼』、そして山川均の『タンクの水』を知る。『牙をぬかれた狼』は、狼たちを搾取する大食いからの解放話であり、山川均の『タンクの水』は水を牛耳る資本家からの解放を教える教訓話であり、アメリカの社会主義者エドワード・ベラミー（Edward Bellamy）の翻訳である<sup>15)</sup>。



梅津は、工場の中でストライキのビラを目にしたときに、この二冊の本のことを思い出し、自分も立ち上がらなければならないと決意する。争議の要求項目の一つとして、一時間の労働

13) 東京朝日新聞、大正15年6月4日、国際労働会議の報道。

14) 明治33年、光明寺村（現在の愛知県一宮市）の織物工場で31名の女工が焼死した。女工たちの宿舎の窓には逃亡防止の目的で鉄格子が嵌められていて、火が発生しても避難することができなかった。当時の多くの女工たちは厳しく監視されていただけでなく、夜業と睡眠不足の中、ときに結核を患いながら酷使されていたため、以前から労働環境の見直しが求められていた。

15) “Equality”（1897）に収録された短編“The Parable of the Water-Tank”は、パンフレットとして版を重ねている。写真の出典は山川均『タンクの水』、上西書店、1925年、p.18。



時間短縮を掲げたが、そのときの状況について次のように述べている。

このビラをみて、私は胸がドキドキして、たまらなくなり、ろくに食事もしないで職場に戻ったけれども、どうしていいかわからない。とにかく12時にみんなに仕事をさせてはいけないんだと思って、夢中で機械の上にのぼり、「みんな仕事しちゃダメだよ！仕事をしたら、このビラにかいてあることを会社がみんなダメにしちゃうのよ。仕事しちゃダメだよ！仕事しちゃダメだよ！仕事しちゃダメだよ！と、「仕事しちゃダメだよ」を3度叫んだのです。すると、どうでしょう。ピシャッと止まったんです。「どうすりゃいいの？どうするの？」とみんな私のまわりに集まってきたけれど、私もどうしていいかわからない、ただ泣けてしまって、「とにかく腰掛けましょう」といってみんな長い木の台に腰掛けたんです<sup>16)</sup>。

何をどのようにすれば状況の変革ができるのかわからないまま、労働環境の改善をしたい一心で、女性たちは梅津の声に耳を傾け、それでもなお機械を動かそうとする男性労働者たちを引っ張り、機械を止めさせた。この一件で梅津は警察に連行され収監されるが、残された女性労働者たちは、梅津が戻るまで仕事をしないとストライキを継続した。そして梅津が工場に戻された後、工場は通常の終業ベルより一時間早い17時に鳴り、工員全員が要求の達成を喜んだ。状況改善のために何をすればいいのかわからないという戸惑い、行動することへの不安、収監の屈辱、この一連の想いの根底には先述した『牙をぬかれた狼』『タンクの水』などから受けた思想的刺激があったと、その影響の強さを振り返っている。丹野はこの梅津の実践で「恐れない」ということと「自己を追い抜く知性」が状況に流されないためには重要であると説き、このような抵抗が自らの励みになったと語っている。この「自己を追い抜く知性」とは自分の中の矛盾を見抜き、自己を超克するような知性をもつように努める姿勢のことであり、前項でみた「無知」の対極にあるものである。戦後、クロード・モルガンの『人間のしるし』やロマン・ロランの『魅せられたる魂』を手にとって読める人たち<sup>17)</sup>は少なく、たとえ梅津のように自分が変わるきっかけを持ちえたとしても、家族や親族からの理解をえられることは難しい時代であった。丹野は、そのような女性たちの人権を回復するべく1925年4月の評議会第二回大会で「総本部婦人部設置並びに婦人部活動に関する決議案」を提案する。

ジェンダー平等の国として知られているアイスランドでは、現在でも女性たちが広場に集まり、男女の平等賃金をめざして、労働時間を短縮してデイオフ・ストライキが行われているが、日本においても、今から100年近く前に梅津はぎ子のような女性労働者らによって、労働時間短縮のためのストライキが行われていたことはあまり知られていない。抑圧を加えてくる体制に矛盾を感じ、人権意識に目覚めることは、時の権力に流されない力を培わせる。丹野セツは、梅津らの抵抗に対して、「私はこの烈しい下からの闘いに突き上げられ、支えられて、婦人部

16) 丹野セツ述、山代巴・牧瀬菊枝編『丹野セツ：革命運動に生きる』、勁草書房、1969年、p. 78。

17) これらの本は備後読書サークル協議会の機関誌「みちづれ」に生活記録を記していた広島主婦グループ（山代が主導）などで読まれていた。

を提案する勇気をかりたてられた<sup>18)</sup>」と語っている。時代の動向に翻弄されてきた「無知の責任」を負う者たちの生活記録の壁を破るためには、権力に反対し続けて戦ってきた丹野セツのような女性たちの記録をたどり対比させることで、戦争責任についても新たな地平が見えてくるのではないだろうか。

## おわりに

戦争と女性とが一つの枠で扱われるとき、戦争を引き起こすのが男性、その被害をこうむるのが女性といった二項対立で考えられやすいが、男女はむしろ相互補完的な一体であり、ともに権威に従属的であることで戦争責任があるということを見てきた。女性の戦争責任といえは、従来、「国防婦人会」や「愛国婦人会」のように熱狂的に国防活動に従事した女性たちや女性作家についての研究が主であったが、本稿では、積極的に戦争協力を行った女性たちではなく、ごく一般の消極的な姿勢の女性たちの「沈黙」に焦点を当てた。戦時下はあらゆる言論活動が規制され、平和を希求する者も戦争に巻き込まれ、だれもが悲惨な日々を送った。その中でも、被害者となるか抵抗者になるかの分かれ道が女性たちにも存在することを確認した。梅津はぎ子が影響を受けた作品の一つ『タンクの水』では、一人ひとりの私欲から解放され、人々が力を合わせたときにはじめて、「水」がすべての者に与えられることを教えている。人々がともに歩もうという支え合いの精神を継続させることで、権力に流されない力を養うことができることを示唆している。

第三次世界大戦がすでに始まっているといわれる昨今、アメリカでは、これまで50年以上にわたって徴兵制を実施していなかったが、女性をはじめて徴兵の対象に含める改定を連邦議会が検討している。欧州においても、女性の徴兵制度が見直され、オランダでは男女を問わず17歳以上の国民が徴兵リストの志願対象になったほか、デンマークでは2026年から女性も徴兵制度に組み込まれることになった。またアジアでは、韓国が女性の徴兵制を検討する動きを見せるなど、世界的に女性が戦争に「参戦する」動きが高まりつつある。今秋、被爆者の立場から核兵器廃絶を訴えてきた日本被団協がノーベル平和賞を受賞した。1974年の佐藤栄作の受賞から半世紀ぶりとなるが、今回の受賞は、「核廃絶運動」を訴え続ける被爆者の声にもう一度真摯に耳を傾けなければならないという強烈なメッセージではないだろうか。

最後に、丹野セツの功績をもう一つ紹介したい。1927年に婦人同盟を発足させた後、1931年、丹野は東京都葛飾区に私財を投じて労働者のための診療所をつくっている。国民健康保険もない時代、労働者が適切な医療行為を受けることは困難であり、高額な治療費を払うことなど不可能であった。この診療所は、丹野セツの死後もなお「四ツ木診療所」として地域の人々の健康を守っている。

(原稿受理日 2024年10月31日)

---

18) 丹野セツ述、山代巴・牧瀬菊枝編『丹野セツ：革命運動に生きる』、勁草書房、1969年、p. 86。



創立当初の四ツ木診療所 (<http://yotsugi.kenwa.or.jp/menu8/index.html>)



現在の四ツ木診療所

